

Title	英語の be についての一考察
Author(s)	岩倉, 国浩
Citation	Osaka Literary Review. 8 p.1-p.20
Issue Date	1969-06-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25797">https://doi.org/10.18910/25797</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 英語の be についての一考察

岩 倉 国 浩

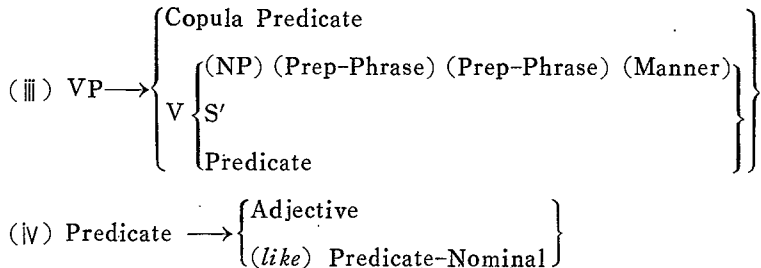
## I

一般の動詞に比べて be のもつ特殊性については今さら述べるまでもない周知の事実であるが、この特殊性の故に be の扱いは一つの問題となりうる要素を含んでいる。これを英語の中で他の動詞・助動詞とどのように関係づけるかについては、いまだ一致した説はないようである。普遍文法 (Universal grammar) を最終的目標とする変形文法においても、学者により be の扱い方が異なっている。もっと正確には今のところまだ be には余り注意が払われていないというのが実状のようである。本論は変形文法の立場から従来の be の扱いを批判しつつ、be を英語の中でどのように位置づけるのが妥当であるかについて一つの考察をし、あわせて一つの提案をしようとするものである。

## II

まず今までの変形文法では be をどのように扱っているかをみてみよう。

チョムスキーは *Aspects of the Theory of Syntax* の中で (p.107)



としているが、上の Copula がまさに be のことである。この書き換え

規則から判断するとチョムスキーはここで *be* を一般の動詞 (V) とは別個のものと考えているようである。Copula は V ではないが、Predicate を従えて VP を構成するのである。さらに (IV) の規則からあきらかなように、*He is a doctor* の *a doctor* は NP ではなくて Predicate-Nominal ということになる。書き換え規則に使われる記号は範ちゅう概念 (Categorial notion) を表わすべきもので、そして範ちゅう概念は機能概念 (Functional notion) とははっきり区別すべきであるとチョムスキー自身述べているが (→*Aspects*, pp. 64~74), ここで Predicate とか Predicate-Nominal というのはあきらかに機能概念を表わす記号である。NP とか VP という範ちゅう概念の記号と、Predicate, Predicate-Nominal といった機能概念の記号を書き換え規則の中で混然と使ったのは余り妥当でないと云わざるをえない。

次に *be* を Copula と表わすことであるが、上の表わし方からすると Copula は V と対等の一つの範ちゅうを表わしていることになる。言いかえれば *be* は V ではなくて Copula であり、V と同じく VP を構成する一要素 (Constituent) となりうるのである。そして

VP → Copula Predicate

という規則からあきらかなように Predicate は optional な要素ではない。したがって必ず Predicate を必要とする場合だけを考えているようで

*I believe that God is*

のような *be* は Copula には含まれないことになる。また Predicate として Adjective と Predicate-Nominal だけしかあげていないが

*She is up*

*The book is in print*

のような場合の *be* もやはり Copula にはいるものであろうし

*My purpose is to question the validity*

*His hobby is collecting stamps*

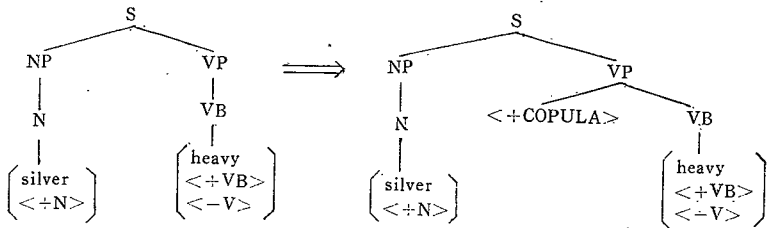
のような *be* もチョムスキーの言う Copula であろうと思われる。このようなことを考慮してみると *be* を Copula として他の一般動詞 (V) とは別な一つの範ちゆうをたてることは良いとしても、そのために Copula のとる NP を Predicate-Nominal として、V のとる NP と区別すると、NP だけでなく Copula のとる Adverb, Prepositional Phrase, Sentence などすべて区別しなくてはならなくなり、簡潔性 (Simplicity) という点から言っても余り妥当でないように思われる。

さて次に最近出版されたジェイコブスとロウゼンバウムの共著による *English Transformational Grammar* (以下 *E. T. G.* と略す) では *be* をどのように扱っているかをみてみよう。

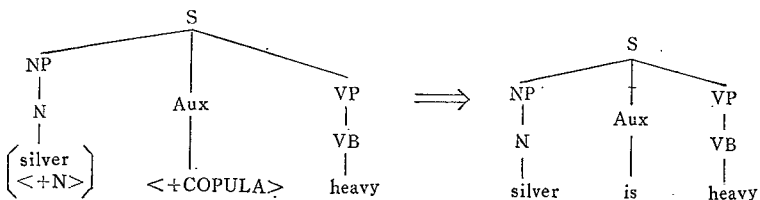
まず *E. T. G.* は VP は必ず VB (Verbal) を一つ含んでいるという考え方をしており、VB は深層構造で常に VP の第一構成要素であるという (→ *E. T. G.*, p.52)。このため、たとえば

*Silver is heavy*

の *is* は Copula segment で  $T_c$  (Copula transformation) によって導き出されるとする (→ *E. T. G.*, p.101)。



そして  $T_{AI}$  (Auxiliary incorporation transformation) によって Copula segment が Auxiliary に組み入れられて



となるのであるという。

要するに *Silver is heavy* の *is* は助動詞 (Aux) ということになり、この VP の VB は *is* ではなくて形容詞 *heavy* なのである。これは Adjective も Verb 同様 VB であり両者のちがいは Adjective が  $\langle -V \rangle$ , Verb が  $\langle +V \rangle$  という素性 (Feature) をもっているというにすぎないという考え方 (→ *E. T. G.* p.63) に基づいている。それでは

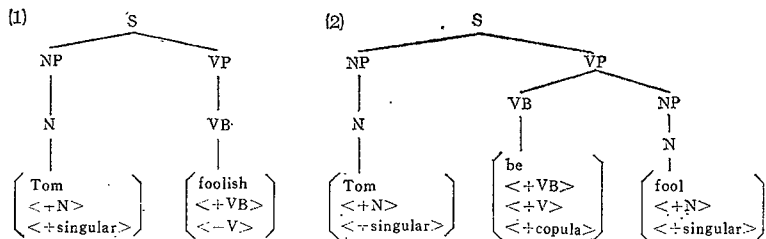
*John is a hero*

のような *be* はどうなるかということが当然問題になるが、この *be* は一種の他動詞ではじめから深層構造に存在するのだという (→ *E. T. G.*, p.113)。したがって *E. T. G.* によると

(1) *Tom is foolish*

(2) *Tom is a fool*

の(1)の *is* は助動詞、(2)の *is* は (他) 動詞ということになり、この二つの *is* の意味・機能の類似にもかかわらず両者は互に異質のものであり(1)と(2)の文はそれぞれ次のような深層構造をもっていることになる。



さらに *E. T. G.* によれば

(3) *He is angry*

(4) *He gets angry*

のような二つの文も互に関連のない、異なる深層構造をもつと説明されることになると推察されるが、*E. T. G.* は(4)のような文については一言

もふれていない。E. T. G. によれば VB とは VP 中の主要素で、深層構造の中で常に VP の第一要素であるというが、そうすると(4)の文の VP は *gets angry* であり、その第一構成素は *gets* であろうから、これが VB とすれば *angry* は VB でないことになる。すると(3)の *angry* は VB で(4)の *angry* は VB でないという不統一な説明をしなくてはならなくなる。

さらに(3)の *angry* を VB と認める立場からすると

(5) (i) *He is in*

(ii) *She is up*

のような *in*, *up* も VB ということになるのであろうか。それともこのような *be* は(2)の文の *be* と同じく動詞というのであろうか。

このように Adjective を Verb と一緒にして VB という一つの範ちゅうに入れることは一見簡潔性に貢献しているようで、その実(1)と(2)の *is* が別ものであると説明したり、(4)のような文の説明が困難になったり、(5)の文や、また

(6) (i) *My aim was to help you*

(ii) *His hobby is collecting stamps*

のような文の *be* をも考慮するとき、かえって事態を複雑にしてしまう恐れがある<sup>2</sup>。以上のことから E. T. G. の *be* の扱いも十分に説得力のあるものとは言いがたいのである。

### III

上で変形文法における *be* の扱い方の二つをみてみたが、両者の共通点は *be* を一般動詞 (V) と区別していることである。それは *be* が統語的に他の動詞にはない特殊性をもっていることに注目するときむしろ自然な考え方も知れない。ここでは *be* を一般動詞と比較してその特殊な点、共通している点を見ていきたい。

まず *be* が一般動詞 (V) と異なっている点を見ていくが、この *be* の特殊性はとりもなおさず *be* の助動詞性ということに外ならない。

(I) 否定文・疑問文を作るのに *do* の助けを借りない。

(1) (i) *Tom is not honest Cf. Tom can not come*

(ii) \* *Tom does not be honest*

(2) (i) *Is Tom a scholar? Cf. Can Tom become a scholar?*

(ii) \* *Does Tom be a scholar?*

(II) 一般動詞の場合は肯定文の文意<sup>3</sup>を強めるのに *do* を使うことができるが、*be* にはそれが許されない。

(3) (i) \* *He did be cruel Cf. \* He did can go*

(ii) *He did come yesterday*

(III) 一般動詞の場合は反復をさけるために代動詞 (Pro-verb) として *do* を用いるが、*be* にはそれが許されない。

(4) (i) \**He is more diligent than you do*

*Cf. He earns more money than you do*

(ii) “*Is he angry?*” \**“Yes, he does.”*

*Cf. “Does he like her?” “Yes, he does.”*

(IV) *Be* は特に口語で Tc (Contraction transformation) を受けて縮約形を作ることができる。

(5) (i) *She is not pretty* → *She isn't pretty*

*Cf. She can not go* → *She can't go*

(ii) *Is she not strong?* → *Isn't she strong?*

*Cf. Does she not love him?* → *Doesn't she love him?*

以上が *be* を一般動詞と区別する特殊性であるが、これらは *be* を助動詞とみなそうとする考え方の根拠になるものである。

次に *be* のもつ動詞性、すなわち *be* が一般動詞と共有する性質をみていきたい。

(I) Be は次のような本動詞としての用法をもっている。

(6) (i) I believe that God *is*

(ii) Whatever *is*, *is* right

もっともこの be については否定文・疑問文を作ることはできないようである。

(7) (i) ? God *is not*

(ii) ? *Is* God?

ただし法助動詞を使う場合は許される。

(iii) God *can not be*

(iv) Can God *be*?

(II) 命令文においては be も一般動詞と全く同じ扱いを受ける。

(a) 一般動詞同様常に不定形 (Infinite form) が使われる。

(8) *Be* quiet! Cf. *Come* at eight!

(b) 強調には do を用いる。

(9) *Do be* quiet! Cf. *Do tell* the truth!

(c) 否定の命令文は don't の助けを借りる。

(10) *Don't be* noisy! Cf. *Don't make* a noise!

(III) 疑問文においていくつかの共通点をもつ。

(a) 疑問詞が主語になるときは be も一般動詞も同じ扱いになる。(すなわち do を使わない)

(11) Who *is* fond of him? Cf. Who *likes* him?

(b) ある特殊な疑問文では be も do の助けを借りることがある。

(12) Why *don't* you *be* more reasonable?<sup>4</sup>

(c) 疑問文が間接疑問文の形になると be も一般動詞も同じ扱いを受ける。

(13) I asked him [ # Are you all right? # ] →

I asked him if he *was* all right



Cf. I asked him [ #Do you know her?# ] →

I asked him if he *knew* her

(Ⅲ) Be を含む文は infinitive complementizer, gerundive complementizer をとって埋め込み文 (Embedded sentence) になるとき be は一般動詞と同じ扱いを受ける。

(a) 肯定文の場合

(14) (i) I want [ #He is honest# ] →

I want him *to be* honest

Cf. I want [ #He makes it# ] →

I want him *to make* it

(ii) She stops [ #She is cruel# ] → She stops *being* cruel

Cf. She stops [ #She plays tennis# ] → She stops *playing* tennis

(b) 否定文の場合。

(15) (i) I want [ #He is not lazy# ] →

I want him *not to be* lazy

Cf. I want [ #He does not come# ] →

I want him *not to come*

(ii) I am proud of [ #She is not bad# ] →

I am proud of her *not being* bad

Cf. I am proud of [ #She does not speak badly# ] →

I am proud of her *not speaking* badly

(Ⅳ) Be は一般動詞と同じく進行形・完了形を作ることができる。

(16) He is cruel to me → He *is being* cruel to me

(17) She is dishonest → She *has been* dishonest

(Ⅴ) 一般動詞と同じく法助動詞 (Modal) をとることができる。

(18) He *may be* sick Cf. He *may feel* sick

以上のような *be* の動詞性は *be* を一般動詞と同じ範ちゅうに入れて *be* を動詞 (V) とみなそうとする考え方を支持するものである。

このように *be* には助動詞性・動詞性の両方があることが分かる。そこで *be* を助動詞・動詞のどちらに考える方が簡潔性その他の点でより有利であるかという問題である。ここでは仮に今までみてきたような *be* を動詞 (V) と考え、*He is studying* や *He is struck by her* の *be* を助動詞とみなし、これを動詞 *be* とと区別する立場をとることにしたい。<sup>5</sup>

#### Ⅳ

上でわれわれは *be* を動詞 (V) とみなす立場をとることにしたが、次に動詞としての *be* がどのようなものを従えるか、すなわち一般動詞がとるようなものをはたして *be* が従えうるかどうかという観点から *be* の動詞性を確かめてみよう。

(1) V は NP をとる。 ( $VP \rightarrow V \wedge NP$ )

これはたとえば

- (1) He kills a doctor
- (2) He becomes a doctor

などの動詞はそれぞれ後に a doctor という NP を従えているわけで、今これらの動詞の代わりに *be* を入れてみると

- (3) He is a doctor

と文法的に正しい文になり、*be* も NP をとることが分かる。そして(1), (2), (3)の a doctor がいずれも NP であることは Tcs (Cleft sentence transformation) をかけて

- (1)' What he kills is a doctor
- (2)' What he becomes is a doctor
- (3)' What he is is a doctor

のようにいずれも非文にならないことによって検証される。

(Ⅱ) Vのとり NP が S を含むことがある。 (VP → V∧NP, NP → N∧S)

たとえば

(4) I like to read in bed

の文の to read in bedであるが、これが NP であることは Tcs で

(4) What I like is to read in bed

と文法的に正しい文が生まれることから分かる。このようなものは名詞句補文 (NP complement sentence) とよばれている。ところで be も同様のSをとることがある。

(5) (i) My task is to preach

(ii) Her object was to know his mind

これに Tcs を加えてみると

(5) (i') What my task is is to preach

(ii') What her object was was to know his mind

となり、(5 i), (5 ii) に含まれた to preach, to know his mind が名詞句補文であることが分かる。Be はさらに他の動詞同様 gerundive complementizer, clause complementizer を備えた名詞句補文をとることもできる。

(6) (i) My hobby is collecting stamps

(ii) This is carrying the joke a little too far

(7) (i) The reason is that the clock was out of order

(ii) The fact is that I forgot all about it

(iii) The queer thing is that we care less and less about her

(iv) Our fear was that he might be killed

(v) The question is whether the news is true or not<sup>6</sup>

(Ⅲ) VはPPをとる。 (VP → V∧PP, PP → P∧NP)

たとえば

(8) He approved of the plan

の文に Tcs をかけると

(8)' \* What he approved is of the plan

(8)'' What he approved *of* is the plan

となることから(8)の文の *of the plan* は NP ではなく PP (Prepositional phrase) であることが分かる。Be も同様に PP をとることがある。たとえば

(9) (i) He was under the sentence of death

(ii) We are on good terms

(iii) She was in a confused state of mind

などがそうで、これらに Tcs を加えてみると

(9)' (i') What he was *under* was the sentence of death

(ii') What we are *on* is good terms

(iii') What she was *in* was a confused state of mind

となり、(9)の各文が PP を含むことが分かる<sup>7</sup>。さらにこの PP に含まれた NP がSをもっていることがある。(VP  $\rightarrow$  V $\wedge$ PP, PP  $\rightarrow$  P $\wedge$ NP, NP  $\rightarrow$  N $\wedge$ S)

(10) (i) He is for returning home

(ii) I am against your going there alone

(iii) The tool is for tightening bolts

(iv) The shaft is to drive the motor

(v) The room is for you to live in

これらは Tcs によって

(10)' (i') What he is *for* is returning home

(ii') What I am *against* is your going there alone

(iii') What the tool is *for* is tightening bolts

(iv') What the shaft is *for* is to drive the motor

(v) What the room is *for* is for you to live in.

といずれも正しい文が生まれることから(10)の各文が PP を含むことが確認

できる。

(Ⅳ) Vは直接Sを従えることができる。(VP → V<sup>^</sup>S) たとえば

(11) He condescended to help me with my homework

の文に Tcs を加えてみると

(11)' \* What he condescended was to help me with my homework  
と非文になることから to help me with my homework は名詞句補文  
ではないことが分かる。すなわちこの to help me with my homework  
は VP に直接支配されるSで動詞句補文 (VP complement sentence)  
とよばれるものである (→ P.S. Rosenbaun, *The Grammar of Eng-  
lish Predicate Complement Constructions*, PP. 93—95)。

Be も同様なSをとることがある。たとえば

(12) (i) We were to meet at the station

(ii) The play is to be presented on Saturday

などがそれでこれらに Tcs を加えると

(12)' (i)' \* What we were was to meet at the station

(ii)' \* What the play is is to be presented on Saturday

といずれも非文になってしまう。

(Ⅴ) V は A(adjective) をとる。(VP → V<sup>^</sup>A)

たとえば

(13) (i) He gets angry

(ii) She seems happy

などがこれで、これらの動詞 get, seem の代わりに be を入れてみると

(14) (i) He is angry

(ii) She is happy

と文法的に正しい文ができることから be もAをとりうることが知れる。  
ところでAは

(15) (i) He is aware of the fact

(ii) I am afraid of the dog

(iii) He is anxious about his health

などのように後に PP を従えることがある<sup>8</sup>ことから AP → A~PP として A を導き出すべきである。この PP 中の NP がさらに S を含んでいることもある。たとえば

- (16) (i) I am anxious for you to marry her  
 (ii) I am eager for her to get along with him  
 (iii) I am sorry for you to think so  
 (iv) They are not keen for their daughter to marry him  
 (v) The children were impatient for the bus to start  
 (vi) The girl is afraid to go to bed in the dark  
 (vii) I am ready to take the examination

などでこれらに Tcs を加えてみると

- (16)' (i') What I am anxious for is for you to marry him  
 (ii') What I am eager for is for her to get along with him  
 (iii') What I am sorry for is for you to think so  
 (iv') What they are not keen for is for their daughter to marry him  
 (v') What the children were impatient for was for the bus to start  
 (vi') What the girl is afraid of is to go to bed in the dark  
 (vii') What I am ready for is to take the examination

といずれも文法的に正しい文が生れる。

その外この名詞句補文が gerundive complementizer, clause complementizer をとっている場合もある。

- (17) (i) She is ready for starting  
 (ii) He is slow in sympathizing with others  
 (iii) I am afraid of being bitten by the dog  
 (iv) He is desirous of obtaining a good job

- (V) She is proud of her son's being wise<sup>9</sup>
- (18) (i) She is aware that her husband has lost the money  
 (ii) He is sure that she is honest  
 (iii) She is afraid that she might be killed by him  
 (iv) He is glad that she is not going abroad  
 (v) I am sorry that your brother failed in his exams  
 (vi) I am doubtful whether I can afford it  
 (vii) I am ignorant who has hurt her<sup>10</sup>

以上のデータを考慮して AP を書き換えると

AP  $\rightarrow$  A $\widehat{}$ (PP), PP  $\rightarrow$  P $\widehat{}$ NP, NP  $\rightarrow$  N $\widehat{}$ (S)

となる。

ところで A は PP を二つとることもある。

- (19) (i) I am not responsible to you for my actions  
 (ii) We are sympathetic with him in his grief  
 (iii) She was angry with him for having broken his promise  
 (iv) I am grateful to you for calling on me  
 (v) I am ashamed for you that you have done such a thing<sup>11</sup>

また A は直接に S を従えることもある ( $\rightarrow$  P. S. Rosenbaum, *op. cit.*, p. 105)。たとえば

- (20) (i) I was happy to receive her invitation  
 (ii) The baby is unable to walk  
 (iii) You are welcome to come

などがそれで、これらに Tcs をかけると

- (20)' (i) \* What I was happy (PREP) was to receive her invitation  
 (ii) \* What the baby is unable (PREP) is to walk  
 (iii) \* What you are welcome (PREP) is to come

といずれも非文になることから, *to receive her invitation*, *to walk*, *to come* は名詞句補文ではなく, AP に直接支配される  $AP \rightarrow A \hat{\ } S$  の S で, いわば形容詞句補文 (AP complement sentence) である。したがって AP<sup>12</sup> は

$$AP \rightarrow A \hat{\ } \left\{ \begin{array}{l} (PP) \quad (PP) \\ (S) \end{array} \right\}$$

のように書き換えられる。

以上みてきたことから *be* は V のとるものを同様に従えることがあきらかになり, *be* の動詞性が確認されたことになる。

## V

以上われわれは *be* について二つの観点から考察してきた。一つは *be* のもつ統語的特性の観点, 今一つは *be* が何を従えうるかという観点で, この二つの観点から *be* の動詞性を確認してきた。ここでまとめの意味で動詞 *be* に関する書き換え規則をあげると

$$S \rightarrow NP \hat{\ } VP$$

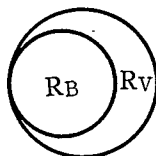
$$VP \rightarrow be \hat{\ } \left\{ \begin{array}{l} (NP) \\ (PP) \\ (S) \\ (AP) \end{array} \right\}$$

$$NP \rightarrow N \hat{\ } (S)$$

$$PP \rightarrow P \hat{\ } NP$$

$$AP \rightarrow A \hat{\ } \left\{ \begin{array}{l} (PP)(PP) \\ (S) \end{array} \right\}$$

となる。<sup>13</sup>この *be* に関する規則 ( $R_B$ ) と他の一般動詞に関する規則 ( $R_V$ ) を比べてみると, ( $R_B$ ) は ( $R_V$ ) の中に包含されてしまうことが分かる。





したがって  $R_V$  が与えられれば  $R_B$  もその中に含まれているわけで、 $R_B$  が別個に与えられる必要はないのである。すなわち *be* を  $V$  として扱えば一般性 (Generality) が高いだけでなく、それがそのまま簡潔性 (Simplicity) ということに貢献することになり、ここに *be* を一般動詞と同一の範ちゅうに入れて、 $V$  として扱うことの大きな利点があるのである。<sup>14</sup>

## 注

1. 本論ができて上がるまでに斎藤武生・佐々木昭の両先生には草稿に目を通して戴いて、有益な助言を戴き、また貴重な文献をも見せて戴いた。そして本論の中の英文が非文か否かについては ニューヨーク大学助教授 C. S. Haynes 博士の御意見によるものである。三先生に心から感謝の意を表明したい。

2. さらに E. T. G. は

(a) He *is* studying very hard

(b) She *is* stung by a bee

の *be* も助動詞と考えているようであるが、すでにみてきたように (1) Silver *is* heavy の *is* を助動詞と考えているため、(1) のような *be* と上の (a) や (b) の *be* との区別がはっきりしなくなってくるという問題も起る。

3. ただし否定文・疑問文の文意強調には使われない。

\* He *did* did not come

\* *Did* he do come?

4. これについて Hornby は次のようにいう。

The interrogative-negative may be formed with auxiliary *do* in rhetorical style or when *be* means 'become'

Why *don't* you *be* more reasonable?

Why *don't* you *be* a man and face your troubles bravely?

Why *don't* you *be* (i. e. train in order to become) an engineer?—

A. S. Hornby, *A Guide to Patterns and Usage in English*, p. 8

5. Be を動詞と考えることに関して、たとえば have にも

(a) (i) *Has* he a nice car?

(ii) She *has not* such a pretty bag.

(b) (i) He *has not* long hair → He *hasn't* long hair

(ii) *Has* she *not* a bicycle? → *Hasn't* she a bicycle?

のような助動詞性があるにもかかわらずこの have はふつう動詞 (V) とみられていることなどを思い合わすべきであろう。そして動詞としての be と助動詞としての be を区別することについては、たとえば have や do にも

(c) (i) He *has* a long nose

(ii) He *has not* finished it yet

(d) (i) Do you *do* such a thing?

(ii) Do you go to bed so late?

のような二種類の have, do があることを思うときそれほど不自然なやり方ではないといえよう。

6. 念のため(6), (7)の各文に Tcs を加えてみると

(6)' (i') What my hobby is is collecting stamps

(ii') What this is is carrying the joke a little too far

(7)' (i') What the reason is is that the clock is out of order

(ii') What the fact is is that I forgot all about it

(iii') What the queer thing is is that we care less and less about her

(iv') What our fear was was that he might be killed

(v') What the question is is whether the news is true or not

といずれも文法的に正しい文が生まれる。

7. ところで(9)の各文と同じく PP を含んでいると思われる次のような文

(a) The book is in print

(b) I am on duty

(c) She is at liberty

は、Tcs を加えてみると

(a)' \* What the book is *in* is print

(b)' \* What I am *on* is duty

(c)' \* What she is *at* is liberty

と非文になってしまう。次に上の文に Tcs を次のようにかけると

(a)'' What the book is is in print

(b)'' What I am is on duty

(c)'' What she is is at liberty

といずれも文法的な文になることから、*in print*, *on duty*, *at liberty*などは本来 PP であったはずのものが P と NP が密着して一つのまとまった単位 (Unit) を作ってしまってもはや分離できなくなってしまうことが分かる。

8. (15)の各文に Tcs をかけると

(15)' (i') What he is aware *of* is the fact

(ii') What I am afraid *of* is the dog

(iii') What he is anxious *about* is his health

となり、(15)の各文が PP を含んでいることが確認される。

9. (17)の各文に Tcs を加えると

(17)' (i') What she is ready for is starting

(ii') What he is slow in is sympathizing with others

(iii') What I am afraid of is being bitter by the dog

(iv') What he is desirous of is obtaining a good job

(v') What she is proud of is her son's being wise

といずれも文法的に正しい文が生まれる。

10. (18)の各文に Tcs をかけると

- (i8') (i') What she is aware of is that her husband has lost the money
- (ii') What he is sure of is that she is honest
- (iii') What she is afraid of is that she might be killed by him
- (iv') What he is glad of is that she is not going abroad
- (v') What I am sorry for is that your brother failed in his exams
- (vi') What I am doubtful about is whether I can afford it
- (vii') What I am ignorant of is who has hurt her

となる。

11. この(19)の各文が PP を二つ含んでいることは Tcs によって分かる。たとえば (19V) の文は

What I am ashamed for is you

What I am ashamed of is that you have done such a thing

という二つの Cleft sentence が文法的に正しいことによって (19V) が二つの PP を含むことが確認される。(19)の他の文についても同様である。

12. Tcsは、テストされる構成素が NP の場合はもちろんだが AP の場合でも正しい文を生み出してしまう。

He is a doctor → What he is is a doctor

He is anxious about it → What he is is anxious about it

そこで NP と AP を区別するためには Tcs で what の代わりに how を用いたらよいと思う。

He is a doctor → \* How he is is a doctor

He is anxious about it → How he is is anxious about it

すなわちこの how を使った Tcs で非文になれば NP, 文法的に正しい文になれば AP ということになる。

13. この規則の中で目新しいのは AP であるが, be と AP との関係は

すでにみてきたとうりで、さらに be 以外の動詞についても

She got angry with him for having broken his promise

He seemed happy to receive her invitation

などのデータから、この規則が有効であることが知れよう。

14. ただ V と be の区別をなくさないために

$V \longrightarrow \left\{ \begin{array}{l} V \\ \text{[Copula]} \end{array} \right\}$  のような規則を設けるのも一案であると思う。

#### 参考文献

1. Bach, E. "Have and be in English Syntax", *Language*, Vol. 43, No. 2 (1967)
2. Chomsky, N. *Aspects of the Theory of Syntax* (1965)
3. Fillmore, C. J. "A Proposal Concerning English Prepositions", *Monograph Series on Language and Linguistics* No. 19 (1966)
4. Hornby, A. S. *A Guide to Patterns and Usage in English* (1956)
5. Jacobos, R. A. and P. S. Rosenbaum *English Transformational Grammar* (1968)
6. Lees, R. B. *The Grammar of English Nominalizations* (1960)
7. Rosenbaum, P. S. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (1967)
8. Vendler, Z. *Adjectives and Nominalizations* (1968)